



# 紀平真理子のオランダ通信

第19回

## イシグログループ 主催のオランダ 施設園芸視察研修(4)

### プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペイン語学専攻卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

### 環境保全型農業に取り組む Royal Brinkman社(後編)

オランダでは第二次世界大戦後にペストが流行し、農薬が使用され始めた。1980年代までは単位面積当たりの農薬使用量は日本と同様にかなり多かった。しかし、当時農産物の最大輸出国だったドイツから指摘を受け、農薬の使用を減らすとともに生物農薬を推奨する政策へと転換した。2007年の農薬使用量は0.4 kg/haで、92年の2.1 kg/haから50%以上削減し、日本の1.2 kg/ha(92年)を大幅に下回っている。さらに、94年には施設園芸、また10年には耕作とガーデニングにおける持続可能な植物保護のルールを導入し、明確な農薬基準が定められた。そのルールの制定によってスプレーヤーやノズルの技術革新、生物農薬のさらなる活用が促進され、現在では生産者をはじめ、農業関連企業も農薬使用量の最小限化を目指している。

ちなみに、生物農薬は主に施設園芸で用いられる。なかでも化学農薬の削減方向にあるオランダでは天敵昆虫が推奨されている。トマトやパプリカ、ナス、キュウリ、イチゴ、さらに一部花きの栽培時に使用される。もともと天敵昆虫は研究者が化

学農薬の使用を続けることで害虫の抵抗性ができてしまうことを指摘したことからは始まり、キュウリの生産者がハダニを食べるチリカブリダニを増殖して使いだしたことで誕生した。その後、その生産者がオランダでKopper社という天敵昆虫メーカーを設立し、長年にわたって研究開発を行なった。Royal Brinkman社も天敵昆虫を取り扱っている。

また、同社ではスペインにある子会社のAgroBio社のマルハナバチも商品ラインナップに加えている。以前、オランダでは受粉に振動受粉方式が採用されていたが、80年代以降に普及したマルハナバチのおかげで受粉の質と着果率が上がった。マルハナバチの利用ではトマトやパプリカの形が均一になるともいわれている。労働コストも大幅に削減でき、大規模生産には欠かせない資材になった。マルハナバチを利用するとそれに害を与える化学農薬が使用できなくなるため、結果として天敵昆虫の使用が促進されるという流れになる。

### ぶれがないオランダ

オランダでは80年代にすでに環境保全型農業へと方向転換をし、国を挙げて環境保全に努めている。環境保全に関する厳しい規制(違反し

た生産者には罰金)と明確な目標数値を定めたことで、目標を達成するために研究者のリサーチや農業関連会社の技術革新が進んだ。近年はその成果が見られている。目標を設定し、達成のための手段を考えて実行する。簡単なようで実行するのはたいへん難しいが、オランダ農業を思い起こすと生産者や農業関連会社、政策などがこのスローガンを忠実に守っていると感ずることが多々ある。



害虫駆除用テープ



マルハナバチ